震災支援通じ未来探る

東日本大震災の支援活動を通じて、まちづくりのあり方を考えたシンポジウム

まちづくり 笠岡でシンポ

東日本大震災の復興支援活動を通じ、助け合いのまちづくりを考えるシンポジウムが17日、笠岡市保健センターで開かれた。パネル討論では支援活動に参加した市民の代表たち6人が提言。協働のまちづくりに何が必要かを検証しながら、笠岡の将来像を探った。

（谷本和久）

官民による「大空と大地のカーニバル実行委員会」が主催。10月の復興支援イベントと11月の防災訓練を踏まえ、今後の地域像を考えるために開いた。討論では「未来を創造する笠岡のまちづくり、人づくりを考える」をテーマに進めた。

支援活動を担う笠岡希望プロジェクトの加藤秀雄代表(66)は「支援活動には多くの市民の協力があった。笠岡の絆を深く感じた」と紹介。笠岡青年会議所の坂本亮平専務理事(37)は「してあげる支援ではなく、思いやりが大切」と訴えた。

六島地区愛育委員会の中尾けい子会長(63)は「出しゃばらず、さりげない支援がいい」と指摘。協働コーディネーター森光康恵さん(54)も「上下関係でなく、相手の尊厳を大切にする姿勢が重要」と強調。市社会福祉協議会の柚木義和事務局長(63)は「対等、平等を尊重したまちづくりが求められる」とした。

県航空協会の中塚総一郎常務理事(59)は「空から直行できる役割を持ち、市民に近い笠岡の空港をどう生かすか考えてほしい」と主張した。基調講演では国際医療ボランティア団体AMDA（岡山市北区）の菅波茂代表(64)が陸、海、空に交通手段を持つ笠岡のよさを紹介した。

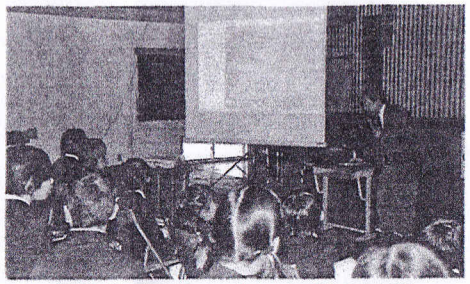
地震・津波 もっと知ろう 笠岡で防災教室

地震や津波災害への備えを学ぶ防災教室が17日、笠岡市北木島町の北木中体育館であった。地元小中学生や住民ら約60人が参加した。北木地区青少年健全育成協議会の主催。

教室では、同市の測量会社の桑折義一社長(63)が、同市沿岸に津波がきたと想定し、グーグル社のソフトを使ったシミュレーションを披露した。「沿岸部では津波は3倍の高さまで上がることもある」と指摘。「ただ、四国沖で発生した津波は笠岡に到達するまで約3時間かかる。慌てず避難を」と呼び掛けた。

また、東日本大震災の被災地宮城県南三陸町への支援を進める笠岡希望プロジェクトの加藤秀雄代表(66)が活動を報告。屋外では、起震車による地震体験もあった。北木中2年西川龍力(りゅうりき)君(14)は「高いところまで津波がくる可能性があるのに驚いた。避難の参考にしたい」と話していた。

（岩崎信明）



津波シミュレーションについて説明する桑折社長